

〈個人研究〉

「地域コミュニティの多様化に対応したコミュニティマネジメントに関する研究—キリスト教の視点から」

キリスト教徒の自治会との関わり

— 寺社の祭礼に焦点をあてた東京23区でのケーススタディ —

壽 崎 か す み*

1. はじめに

1.1 背景と目的

近年、住民主体のまちづくり、地域コミュニティの再生、行政とのパートナーシップ（石原・西村、2010）といった言葉が頻繁に聞かれるようになった。東京はもとより、地方においても高齢化の影響を受け、旧来の地域コミュニティが弱体化しているが、その一方で住民参加、地域の担い手となる人を確保し、また組織を維持することの重要性が言われている。地域コミュニティ強化の必要性は東日本大震災後、さらに強く言われるようになった。京都市は旧来の自治会等の地縁組織に若い人を取り込む、新規住民をとりこむ方策についても検討している（前田・森重、2012）。しかし、旧来の地縁組織は地元の神社の氏子組織をもとにしているケースもあり、神社の祭礼などの役割も担っているケースがある。

その一方で住民の価値観は多様化している。一例としてキリスト教徒の立場から見ると、神社の祭礼などを「伝統文化」として評価しつつも、信仰の面から「関われない」とするケースがある（壽崎、2015）（Susaki, 2016）。

本論文では、第二次世界大戦後、日本全国から多くの人が流入し、また外国人居住者も多い東京23区を対象に、自治会等と寺社の祭礼との関わりについてのキリスト教徒の立場を調査した結果を

報告し、京都での調査結果と合わせて今後、地域コミュニティ運営の向うべき方向性を示唆する。

日本人の宗教意識、在日外国人コミュニティとキリスト教教会の関わり等については既往研究があるが、日本人キリスト教徒が日常生活のなかで寺社の祭礼にどのように対応しているかを調査した研究は（壽崎、2015）、（Susaki, 2016）以外、見つかっていない。

1.2 研究の方法

二段階のアンケート調査を行った。はじめに、『キリスト教年鑑2016』（以下「年鑑」）（キリスト教年鑑編集委員会、2016）に掲載されている東京23区内のキリスト教教会の牧師、神父等（以下「教職者」）あてに郵送アンケート調査を実施した。年鑑に記載されていた教会は615、「不着」で戻ったものが19通あった。実際に送付できたアンケート票は596通である。調査票では、回答する教職者が個人としてあるいは教会が法人として自治会に加入しているかどうか、教職者あるいは法人としての教会の寺社の祭礼等への関わり方、信徒への指導、教職者の居住地（東京23区内か否か）さらに、信徒へのアンケートへの協力を依頼できるかどうかを尋ねた。

次に、信徒へのアンケートに協力が可能との回答を得た教会に、信徒用アンケートを送付し、配布を依頼した。信徒用アンケートは依頼文、調査票、返送用封筒をセットにし、信徒から回答を直接郵送で回収することができるようにした。調査

* 龍谷大学 国際学部

票では、回答者の自治会加入の有無、礼拝欠席理由、寺社の祭礼等への関わり方、居住地（東京23区内か否か）などを尋ねた。

信徒への調査票配布に協力を得られた教会は28教会、プロテスタント教会（日本聖公会を含む）が27、カトリック教会が1である。教会に配布を依頼した調査票は811通である。

2015年に京都市で実施した調査の結果と比較できるように教職者用、一般信徒用ともに、2015年の京都市での調査に使用した調査票と基本的に同じものとした。

2. キリスト教の寺社の祭礼に対する立場

キリスト教は、世界三大宗教のひとつであり、一神教である。一神教なのでキリスト教の神以外を拝むことを認めない。また、偶像（例えば仏教の仏像）を拝むことも禁止している。このため、キリスト教徒が寺社の祭礼等の手伝いにする場合には、「宗教的な部分には関わらず、買物、会計などを手伝う」といった回答が2015年の京都での調査ではみられた（Susaki, 2016）。

キリスト教にも複数の宗派があるが、日本国内にあるキリスト教教会は大きく、プロテスタント教会とカトリック教会にわけられる。カトリック教会は『カトリック教会の宗教対話の手引き』（日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009）を一般信徒向けに発刊しており、この中で「他の宗教との関係は対話的であることを望む」という立場を示し、日本人が日常生活で出会う他宗教との関わり方について以下のように述べている（日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009：33）。

⑥対話に関連して寺社の参列、ほかの宗教行事の受け入れの可否は、基本的に次の原則により判断します。

(1) ほかの宗教行事への参加のあり方を積極的参加と受動的参加の二通りに区別します。わたしたちは積極的参加ではなく、受動的参加、つまり相手に表敬の態度を示すために参加します。それをここでは「参列」（respectful presence）と表現します。

(2) 宗教的行為と社会的儀礼を区別します。

前者は信仰を含みますが、後者は信仰を含まないものと判断して取り扱います。

「参列」と「参加」の違いについては（カトリック中央協議会、2009：37）に次のように記されている。

「参列」は「参加」とは異なります。その宗教を信じ、受け入れて宗教儀式に出席するとき「参加」していると考えられます。信仰が異なることをわきまえて出席することを「参列」といいます。参拝や参詣は「参加」にあたります。

具体的に地域の祭りについては（日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009：45）で

地域のお祭りは、その地域の歴史と深いかわりがあり、最近は無形文化財として保護しようとする機運も見られます。地域社会では近所づきあいが大切ですからお祭りに参列することは許されるでしょう。

としている。

さらに、参列と参拝を区別するために「して良いこと」と「遠慮すべきこと」が詳細に示されている。例をあげると「お神輿を担ぐことは原則的に遠慮してください。しかし、町内の伝統行事の一役としてお神輿をになうように依頼されたときは、近所付き合いとして協力してもよいでしょう」（日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009：46）。お祭りの協賛金については「氏子の居住圏内に住む場合は、近所付き合いとして協賛金を出すことは許されるでしょう。そうでない場合は、無形文化財保存の立場から協賛金を出してもよいでしょう。」（日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009：47）。「神社仏閣の祭礼に参列するときは、尊敬を表す合掌、敬礼、焼香、献花の範囲にとどめましょう。玉串奉奠、お神酒、拍手を打つことや、鈴を鳴らすことなどは遠慮しましょう。」（日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009：53）。「数珠を手を持つことは差し控えましょう。」（日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009：68）。

プロテスタントは各宗派により異なるので、カトリックのような統一見解はない状況にある。

3. 東京23区内のキリスト教会の現状と教職者と祭礼

3.1 東京23区内のキリスト教会の現状

年鑑の地区別教会索引には東京23区内の教会として700の教会が掲載されている。アンケート票送付にあたり住所等の情報をデジタルデータで準備することが必要になるため年鑑の購入者が利用できる「キリスト教年鑑 WEB サービス」(キリスト教年鑑 WEB,2016) を利用して調査対象教会のリストを作成した。リスト作成のさいにキリスト教の学校の礼拝堂などで一般の人が礼拝に集うことのない教会、教区事務所等の施設を除いた。リストにあがった教会の数は615である。

東京23区内に現在存在する教会で、年鑑で設立年が確認できた教会の中で一番古いのは日本基督教団の新栄教会（目黒区）と日本聖公会の立教学院諸聖徒礼拝堂（豊島区）で1873年設立である。1873年から1899年までに23区内には44の教会（江戸川区1、北区1、江東区1、品川区2、渋谷区3、新宿区1、墨田区2、世田谷区3、台東区4、中央区2、千代田区5、豊島区2、文京区7、港区8、目黒区1）がつけられた。現在の宗派別に見ると、カトリック5、救世軍1、単立1、日本基督教団27、日本聖公会10である。単立はドイツ語で礼拝を行う「ドイツ語福音教会」である。この時代につくられたプロテスタントの教会は大部分が日本基督教団に編入されていることがわかる。

23区の区ごとの教会の数を表1に示す。年鑑および年鑑 WEB サービスで情報が得られた外国語で礼拝を行っている教会の数も合わせて示す。各教会が日本語と外国語の礼拝を行っているのか、外国語の礼拝のみを行っているのかは年鑑および年鑑 WEB サービス上の情報からは判別しきれない。

外国語礼拝を行う教会が多いのは新宿区である。新宿区内に外国人の集住地があることが関係している。使用される言語も、韓国語、中国語、英語、タガログ語、ミャンマー語と様々である。次に外国語礼拝を行う教会が多い渋谷区は、韓国語、中国語もあるが英語の礼拝が多く、スペイン語の礼拝もある。荒川区は外国語礼拝を行っている8つ

表1 教会数と外国語礼拝を行う教会数

	教会数	外国語礼拝
足立区	26	1
荒川区	19	8
板橋区	30	2
江戸川区	26	7
大田区	32	3
葛飾区	16	1
北区	13	0
江東区	16	2
品川	20	3
渋谷区	35	9
新宿区	58	16
杉並区	56	0
墨田区	16	3
世田谷区	70	1
台東区	17	1
中央区	10	1
千代田区	17	4
豊島区	27	4
中野区	26	3
練馬区	35	2
文京区	20	3
港区	17	3
目黒区	13	1
	615	78

（キリスト教年鑑編集委員会、2016）より作成

の教会すべてで、韓国語礼拝が行われている。江戸川区は韓国語と英語が半々で、英語とタガログ語の教会もある。港区は3教会とも英語の礼拝を行っている。

教会の数が一番多いのは世田谷区であるが、外国語の礼拝を行っている教会は1か所しかない。杉並区も教会の数は三番目に多いが、外国語の礼拝を行っている教会はない。

表2 外国語礼拝で使用される言語

1つの教会が使用している言語	教会数
英語、ポルトガル語、スペイン語、インドネシア語、ベトナム語、ポーランド語	1
韓国語	35
英語	30
スペイン語	1
ロシア語	1
英語、タガログ語、中国語	1
英語、タガログ語	4
韓国語、中国語	1
中国語	3
英語、カチン語、ミャンマー語（月1回）、カレン語（月2回）	1
英語、中国語、韓国語	4
英語、スペイン語	1
韓国語、英語	2
ビルマ語	1
英語、インドネシア語、ドイツ語	1
ドイツ語	1
英語、韓国語、中国語、台湾語	1

（キリスト教年鑑編集委員会、2016）より作成

外国語礼拝で使用されている言語について表2に示す。

礼拝に使われている言語から教会数を数えると、韓国語の礼拝に出席できる教会の数は43、英語の礼拝に出席できる教会は46である。中国語6、ドイツ語、スペイン語等のヨーロッパ系言語の他、フィリピンの現地言語であるタガログ語は5である。ひとつの教会が複数の言語の礼拝を行っているケースが多いこともわかる。

外国語礼拝の実施状況からも、東京には多数のキリスト教徒の外国人居住者がいて、自分たちの信仰とコミュニティを守っていることがわかる。

3.2 教職者の祭礼への関わりに関する調査概要

東京23区内に存在するキリスト教教会の教職者を対象とした郵送アンケート調査を2016年11月1日から12月末日に実施した。キリスト教会は年鑑に掲載されているものすべて（教区事務所等除

く）を対象とした。アンケート票の送付数は615通、そのうち不着で戻ったものが19通あり、調査対象者に届いたものは596通である。得られた回答は195通（12月末日に遅れて到着したものも含む）、このうち有効回答が192通で回収率32%である。

3.3 教職者の地域の祭礼への関わり

教職者の自治会加入率は66%である。

地域の寺社等の祭礼の参加者について質問したところ「自治会員全員参加が建前」という回答は8%、「自治会員の中の有志」が68%、「その他」が20%であった。「その他」に記載されたコメントには「教会に表立って参加の要請はありません。おそらく担っている方も一部いると思われますが、公的には不明です」、「新興住宅地であり、そのような慣習がない」、「この自治会では関わっていない。そもそも近くに神社仏閣がない。それで宗教

上の摩擦はない」などあり、そもそも寺社との関わりが希薄な地域が少なくないことがわかる。

自治会に加入している教職者が地元の寺社の祭礼に関わるかどうかを尋ねた結果が図1である。

「一切関わらない」が71%である。「一定の条件のもと」、「その他」の内容は「おみこしの休憩所として振る舞い酒提供」（参加者の労をねぎらう意味）、「宗教行事でない部分だけ」など宗教的な意味を持たない部分のみ関わるというものと、「他の活動に積極的に関わることで祭礼に関わらないことへの大きな了解が得られている」の二つに大きく分けられる。

寺社の祭礼等に関わらないことの理由を地域の人に説明しているかという問に対する結果を図2に示す。「何もしない」が66%と多い。コメントとしては「キリスト教の教会なのでわかって下さっているようです」などがある一方で、しつこく聞かれた場合にどのように対応しているかを説明する記述もあった。「日曜日は礼拝があるので、日曜日に行われる祭礼には、時間的理由から出席できないことを説明するが、礼拝の司式が教職者の仕事であることを理解してもらうのが大変」といったコメントも見られた。

寺社の祭礼等にかかわらないことによる地域の人との摩擦は「ない」が94%である（図3）。

地域との関係については、自由記述欄等の記載に

- ・神社の宮司さんたちは「区の宗教者懇話会」で仲良くやっています。

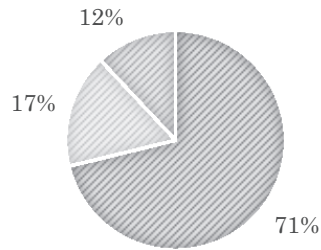
という記述がある一方で、

- ・寺社の祭礼には関わらないし、自治会も会として関わらないよう（政教分離、信教の自由）申し入れている。

といった記述もある。

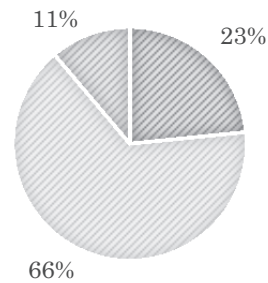
また、

- ・私たちの教会に並立する幼稚園も110年の伝統があり、キリスト教保育をする幼稚園として地域の信頼があつく、神社祭儀とは競合しておりません。
- ・当教会が町内最古の宗教施設のため、既に一定の理解を得ている。
- ・町内には宗教施設が当教会ともうひとつキ



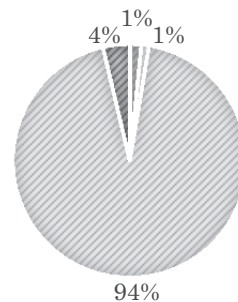
■ 一切関わらない ■ 一定の条件のもと ■ その他

図1 寺社の祭礼にかかわるか



■ 聞かれれば答える ■ 何もしない ■ その他

図2 地域の人への説明



■ ある ■ かつてはあった ■ ない ■ その他

図3 地域の人との摩擦

リスト教の教会しかないという特別な事情にあります。

など、他の宗教施設がない、あるいはキリスト教会が十分古くからあるために問題がおきていないという記述も見られた。

さらに

私たちは常に、自分よりも弱い者を守ってゆかなければなりません。地域の弱者としてまず第一に挙げられるのは私たちの居住エリ

アでは、外国人です。イスラム教徒や（大半がキリスト教徒である）韓国人が、神社の祭礼に参加できますか？ 祭礼への参加や寄付が義務であるような自治会はこれからの時代、加入者の激減でおそかれはやかれ、立ち行かなくなるでしょう。また、祭礼と結びついていきのびようとするような地域は、いずれ人口減少に苦しむでしょう。つまり、これからの時代、いずれ地域活動は祭礼と切り離される方向に動いてゆくでしょう。ですから私たちはそれまでのわずかな間、地域の弱者である外国人たちの信仰を体を張って護らせてあげたいと思うのです。

幸い、私たちの町は、スーパーマーケットにムスリムやユダヤ教徒用のハラル食品コーナーがあるほどインターナショナルです。（後略）

というコメントもあり、外国人居住者の増加が地域社会を変えている様子がみられる。

4. 23区内に居住するキリスト教徒と寺社の祭礼の関わり

4.1 調査概要

信徒への調査票配布に協力を得られた教会は28教会、プロテスタント教会（日本聖公会を含む）27、カトリック教会1である。教会に配布を依頼した調査票は811通である。依頼文、調査票、返

信用封筒をセットにして配布した。調査票は回答者から個別に郵送で回収した。調査期間は2017年1月10日から3月10日である。遅れて到着した回答も、合わせて集計している。配布を依頼した教会で実際に配布された調査票の数が不明なので正確な数字は不明であるが、811通全部配布されたとして、回収した調査票は394、回収率は48%である。回収した調査票のうち、洗札を受けておりかつ23区内に居住する人からの回答は292である。23区外居住者も含めて洗札を受けている人のみの数は364、23区外から23区内の教会に通う人が78人である。

4.2 23区内に居住するキリスト教徒と地元の祭礼の関わり

これ以降、洗札を受けていて、23区内に居住する人からの回答のみを対象とする。

自治会への加入率は70%である。礼拝の欠席理由を複数回答で尋ねた結果を図4に示す。「欠席しない」が71ある。欠席理由としては「病気・体調不良」が一番多い。「その他」としては「地域の活動に参加」、「友だちと会う」などがある。今回の調査は調査対象をコントロールできていないので、この結果を回答者の傾向とみることできる。

「寺社の祭礼を宗教行事としますか」という問に対する回答を自治会加入者（図5）と、非加入者（図6）に分けて示す。

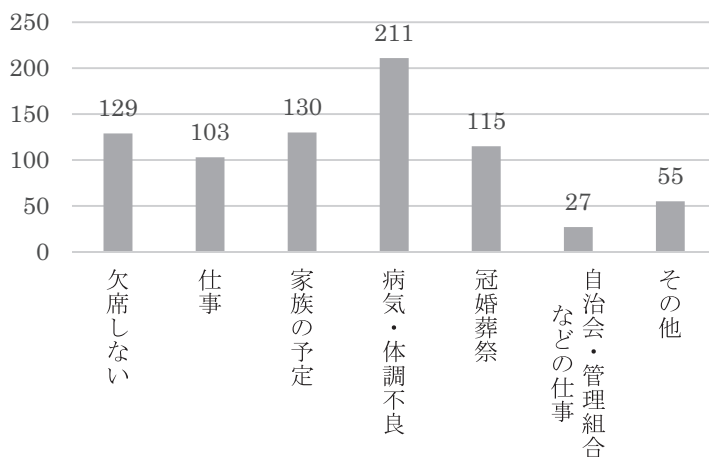
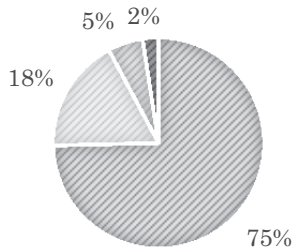
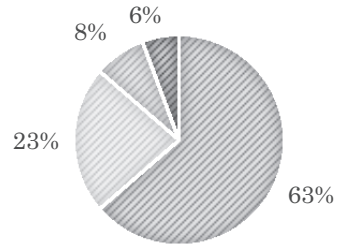


図4 礼拝欠席理由



宗教行事と
■思う ■思わない ■わからない ■その他

図5 自治会加入者の回答



宗教行事と
■思う ■思わない ■わからない ■その他

図6 自治会非加入者の回答

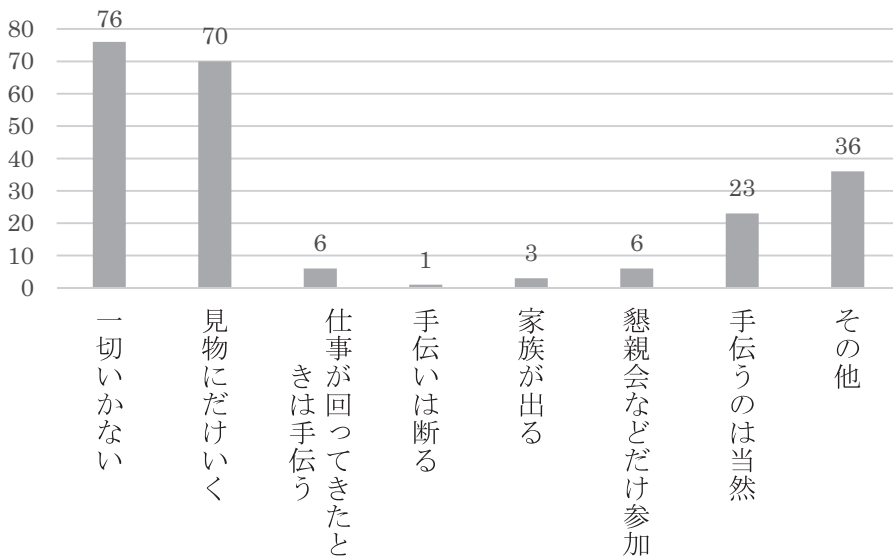


図7 寺社の祭礼との関わりかた（自治会加入者）

自治会加入者の「宗教行事と思う」という回答が10%以上高い。また、「私（キリスト教徒）は宗教行事と思っているが、ほかの人（キリスト教徒でない人）は宗教行事とは思っていないのではないかと思う」というコメントが複数みられた。

寺社の祭礼とどのように関わるかについて尋ねた結果を図7、図8に示す（複数回答）。

自治会加入者、非加入者いずれも「一切いらない」、「見物にだけいく」が大多数を占める。自治会加入者には「仕事が回ってきたときは手伝う」という回答がみられる。自治会非加入者にも「手伝うのは当然」とする回答があるが、付記されているコメントなどから、それが煩わしいので自治会に加入しないという結果につながっていること

が予測される。

「神社への寄付をしますか」という問に対しては自治会加入者の20%は「依頼があれば寄付する」と回答しているが、23%をしめる「その他」のコメントは「町内会費に神社への寄付は入っていない」、「寄付の依頼がきたことはない」などが多い。実際に寄付を依頼されている回答者は少ないことも予測される（図9）。

「町内会は神社と関わりを持っていないので質問の意味がわかりません」というコメントもあった。

非加入者の回答を見ると（図10）「町内会に入っていないので寄付しない」が72%を占める。「町内会費に含まれる分のみ」という回答は、「も

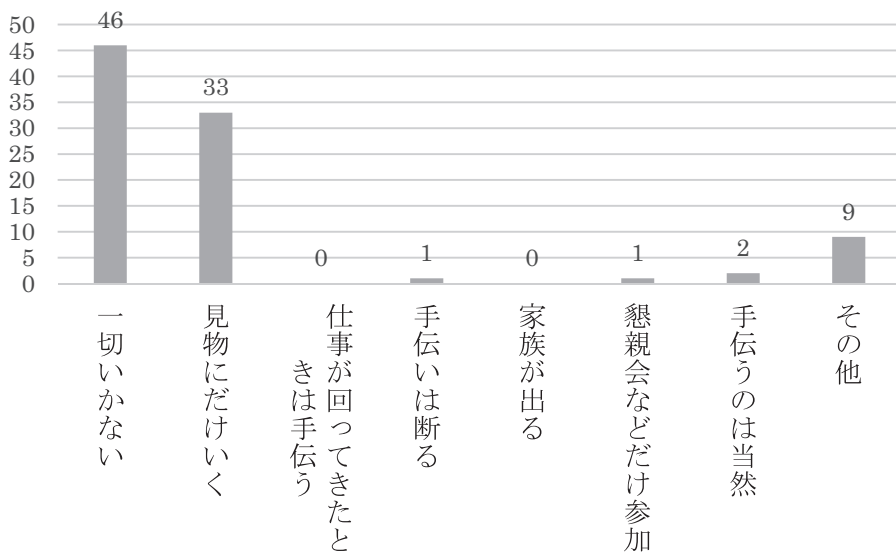


図8 寺社の祭礼との関わりかた（自治会非加入者）

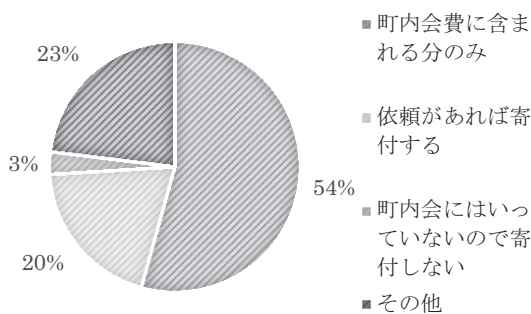


図9 神社への寄付をしますか（自治会加入者）

し加入していたら」という仮定での回答と予測される。

いずれにしても、寄付はしていないとみなすのが妥当と考える。

「寺社の祭礼との関わりを自分の意思で決めてトラブルが起きないとしたらどうしたいですか」という問に対する回答が図11、図12である。自治会加入者の40%、非加入者の60%が「一切関わりたくない」としている。しかし、自治会加入者の36%は「大切な伝統行事として手伝う」を選択している。このことについて調査票に記載されたコメントを見ると

- ・「祭」「神社」「仏閣」は日本の大切な伝統と思っています。それに関わる人々の生活を

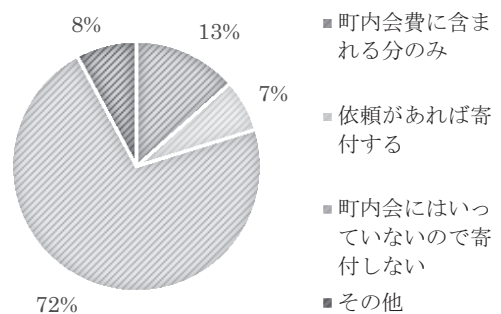


図10 神社への寄付をしますか（非加入者）

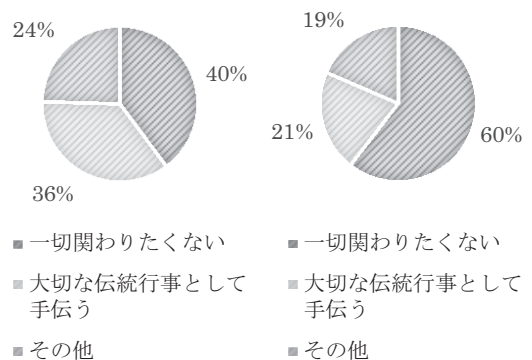


図11 自治会加入者

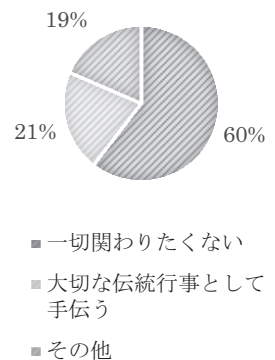


図12 自治会非加入者

経済的にも支えていることを考えると、キリスト教だけに関心を持ち続けるのは好ましいとは思わない。共存できるよう努めたい。

- 地域の祭礼等は伝統行事、あるいは風習と考えているので、それらを守り地域とのコミュニケーションをはかるためにもできるだけ参加するようにしている。それで問題は生じていない。自分の信仰は守りつつ、他者との共存をはかるのもカトリック教徒として必要なことと考えている。

という積極的な立場もある。二つ目のコメントは、(カトリック司教協議会諸宗教部門編, 2009) に示されたとおりの行動である。

また

- 私の地元では参加・不参加は個人の全くの自由であり、トラブルが起こったことはない。
- 神社と関わることは殆どないので問題ありません。
- トラブルが起きるほど熱心ではない（強制的ではない）。
- 自由に決めても、もちろん何のトラブルも起きないでしょう。誰も強制してくる人はいません。
- 今まで自分のこととして考えたことがないので、アンケートを機に考える機会を与えられ良かったと思っています。
- 質問の意味がわからない。

などのコメントがあった。いずれにしても、寺社の祭礼に関して自治会からのプレッシャーは感じていないと推測できる。

このような状況のもとで、自治会加入者の36%が「大切な伝統行事なので手伝う」と答えているのは興味深い。

5. 結 論

2015年度の京都市での調査結果と比較して、東京23区のキリスト教徒は自治会に加入しながらも、自身の信仰をまもりやすい状況にあることが明らかになった。

京都では教職者であっても寺社の祭礼に「一切関わらない」34%であったが、東京23区では

66%である。その理由のひとつとして、寺社の祭礼への参加が京都では「自治会員全員参加」34%、「有志の参加」39%なのに対し、東京23区では「自治会員全員参加」8%、「有志の参加」68%という自治会の状況の違いがあると考えられる。

「寺社の祭礼を宗教行事と思うか」という問いに対し「思う」と答えた人の割合は京都では75%、東京23区でも自治会加入者に限るとほぼ同率であるが、自治会非加入者は63%で、「思わない」、「わからない」が多い。

京都市での調査結果と比較して違いが最も大きいのは「自分の意思で選んでトラブルがないとしたらどうしたいか」という問いに対する回答である。東京23区の自治会加入者は「宗教行事である」と思う人が75%であるにも関わらず「一切関わりたいくない」が40%、「大切な伝統行事として手伝いたい」が36%で、京都の「一切関わりたいくない」49%、「大切な伝統行事として手伝いたい」27%と10%ずつ差がある。

理由として考えられるのは、東京は江戸時代に開発された都で、明治維新で大きく変わった。また関東大震災、第二次世界大戦で壊滅的打撃を受けた。このため教職者の調査票に記されたコメントにもみられるように

- 私たちの教会に並立する幼稚園も110年の伝統があり、キリスト教保育をする幼稚園として地域の信頼があつく、神社祭儀とは競合しておりません。
- 当教会が町内最古の宗教施設のため、既に一定の理解を得ている。

という状況があり教会も伝統ある宗教施設となり得ていることである。圧倒的に長い歴史を持つ寺社と新しいキリスト教教会という枠組みがある京都と、このような枠組みのない東京の違いである。

また、一般の信徒のコメントにみられるように、「寺社の祭礼への参加・不参加を各自が自由に決めても、それでトラブルが起きるほど自治会等も熱心ではない（強制的ではない）」という状況があることの結果として「宗教に関わらない部分のみ手伝う」といった手伝い方選択の許容度が高く、それが「大切な伝統行事として手伝いたい」とい

う回答が多いことに影響していることも予想できる。

以上の二点は調査結果からの仮説であり、今後の検証が必要である。

今後も人口減少が進むこと、外国人居住者の増加が予想されることを前提にすると、教職者のコメントにあったように自治会と寺社の祭礼を切り離す、あるいは自治会に加入しても寺社の祭礼に関わらずにいられるようにすることは重要であると考ええる。居住者の価値観等が多様化する中で、寺社の祭礼以外にも価値観等の点から自治会員が均一に担うことは負担となる活動内容が自治会の活動の中にあることも考えられる。

地域コミュニティの再生にあたり、現在の自治会組織あるいはそれに類する組織を維持するにしても、加入者がそれぞれ、関わりやすい活動に携わることで全体として地域に必要な活動が充足するような組織運営の方法を考える時期に来ていると考える。

参考文献

- (石原・西村、2010) 石原武政・西村幸夫(編)『まちづくりを学ぶ』有斐閣 2010年
- (壽崎、2015) 壽崎かすみ「京都市におけるキリスト教会の地域との関係に関する研究」日本地域学会 第52回年次大会発表論文集 2015年10月
- (前田・森重、2012) 前田昌弘、森重幸子「地蔵盆の運営実態と地域のレジリエンス向上に果たす役割に関する研究」大学コンソーシアム京都 2012年度助成研究報告書 2012年
- (Susaki, 2016) Susaki Kasumi "A case study of the present situation of diversity of faith in Kyoto-city" PROCEEDING BOOK PRSCO 2016 pp.382-389 2016
- (キリスト教年鑑編集委員会、2016) キリスト教年鑑編集委員会 『キリスト教年鑑2016』キリスト新聞社 2016年
- (日本カトリック司教協議会 諸宗教部門、2009) 日本カトリック司教協議会 諸宗教部門編 『カトリック教会の諸宗教対話の手引き 実践Q & A』カトリック中央協議会 2009年
- (キリスト教年鑑WEB、2016) キリスト教新聞社「キリスト教年鑑WEB サービス」
<http://christianyearbook.net/> (2016年8月1日から10月10日参照)